古楽講座　むかしの楽器「トランペット&オーボエ編」

日時：2019年10月13日（日）16:00-17:30
会場：円形ホール（1F）
講師：三宮正満（バロックオーボエ）
　　斎藤秀範（バロックトランペット）
伴奏：西野 晟一朗（チェンバロ）、山本徹（バロックチェロ）
演奏曲：G.フィンガー：トランペット、オーボエと通奏低音のためのソナタ ハ長調
　　G.Ph. テレマン：トランペット・ソナタ　ニ長調　TWV44:1
　　C.シャフラート：オーボエと通奏低音のためのソナタ　ニ短調 CSWV G:2

古楽祭2日目には、斎藤秀範氏（トランペット奏者）と三宮正満氏（オーボエ奏者）を講師にお迎えしての古楽講座が行われました。会場の円形ホール舞台には様々な種類のトランペットやオーボエ、関連する世界の楽器等がずらりと並べられ、それぞれの楽器が長い歴史をかけて大きさや形状等を変えながら発展し、受け継がれてきたことが視覚的にも伝わってくるかのようでした。

ナチュラルトランペットはいわば一本の管にベルがついたシンプルな形状の楽器です。独特の素朴な音色が魅力的ですが「ドミソシド」すなわち倍音しか吹けないため「１つの調に縛られず、色んな調を吹きたい」という欲求が高まる中で、キーを付けることで半音も出せるトランペットが登場していったそうです。その後産業革命の影響で楽器の改良が進み、金属加工が取り入れられ「バルブシステム」が誕生することになります。複数のバルブモデルが提案された中で、主に「ペリネ式バルブ」が現在まで残っていますが、バルブによって均質に弾けるようになり、管の長さも短くなっていったことが分かりました。演奏も交えながらのレクチャーで、トランペットの時代ごとの音色の違いや音量、演奏法などの特徴を間近に体感できる機会となりました。

一方、リード楽器であるオーボエは世界各国に仲間があり、チャルメラやトルコのショーム（ズルナ）、日本の篳篥などが紹介されました。いずれも良く鳴る楽器で、かつては屋外で演奏されていました。特にオーボエの前身であるショームは軍隊でも使用され、そのイメージも強ったために欧州で最初に弦楽器のみでオーケストラが結成された際には「仲間に入れてもらえなかった」そうです。室内では音量が大きすぎたことも一因で、楽器を細くし、音量も小さく改良して「オーケストラの仲間入りを果たした」とのことです。1720年頃のバッハの時代のモデルに続き、モーツアルトやベートーヴェン初期の時代には楽器が細くなり、高くて（high Fまで）輝きのある音が出せるようになったこと、さらにメンデルスゾーンやシューマンの時代に使われていたオリジナル楽器を披露され、この時代には穴を増やし遠隔装置も付けることで、全ての音を安定して滑らかに、かつ力強く出せるようになったこと等を紹介されました。

ところでオーボエ奏者として活動する際には避けられないのが「日々リードを削る」作業です。リードをうまく削るには「ナイフを研ぐ」作業、さらにナイフを研ぐためには「砥石を平面にする」作業も必要…ということで、実際に音を出せるまでに幾つもプロセスがあるということです。

大変綿密に準備して下さったことが伺える、充実した内容のレクチャーで、合間には西野氏のチェンバロと山本氏のバロックチェロ（賛助出演）の共演による演奏も楽しめる贅沢な機会でした。講座終了後には大勢の受講生が会場に残り、講師の先生方を囲んで熱心に質問等をされていたのが印象的でした。両者の先生に共通していたのは、ある音楽（作品）を奏でる際にどのような楽器や演奏法で臨むのがもっとも望ましいのかを常に真摯かつ謙虚に探求しつづける、演奏家としての姿勢のように思われ、その余韻がいつまでも心に残りました。

■アンケート（2019年）

・素晴らしい企画。とても良かった。斎藤さん、三宮さんのお話もわかり易くて楽しかった。
・非常に興味深くとても勉強になりました。熊本から来て良かったです。
・オーボエ、トランペットのとても深い内容を、色々な楽器とわかりやすいお話しと共に聴く事ができ、とても充実した講座でした。これ、たったの1000円でよいのでしょうか？という素晴らしい内容でした。超一流の先生方の演奏とお話を近くで聞けて、とても感動でした。ありがとうございました。

交歓パーティ

日時：2019年10月12日（土）開宴19:00
会場：ウォーターサイトカフェオットー（毎日会館1F）

初日の夜、古楽祭の恒例イベント「交歓パーティ」がアクロス福岡近くのカフェオットーにて開催されました。多忙なスケジュールの合間をぬって、演奏家や講師の先生方をはじめ受講生など多くの参加をいただき、美味しい食事を囲んであちこちで会話が盛り上がりました。合間には恒例の演奏家や講師の先生方によるスピーチをいただいたほか、今回はスペシャル企画として、地元福岡と関東でプロとして活躍する若手チェンバロ奏者・西野晟一朗さんへのインタビューもありました。西野さんはピアノを習っていた中学三年生の時に福岡古楽音楽祭（10周年、2008年）に参加され、会場で聞いたチェンバロの音に深く感動し、この体験がきっかけでチェンバロを志すことになったそうです。古楽との出会いがここに集う人達それぞれに大きな影響を与えてきたことを実感するとともに、古楽祭がこれからも古楽の魅力や楽しさを共有できる場として益々充実していくことを願いました。

また、今年で古楽祭がリニューアルして6年目を迎えるにあたってチラシやプログラム等のデザインが一新されましたが、デザインを担当されたリコーダー奏者でイラストレーター（そしてサポーター）の野田ようこさんから、制作にあたって工夫した点などエピソードをご披露いただきました。パネル展のモデルとなった「こーへー君」ことリュート奏者の太田耕平先生も一緒に登壇してくださり、とてもアットホームなひとときとなりました。

パネル展「音楽の街　てくてく旅（イタリア編）～こーへー君が行く～」

日程：2019年10月7日（月）～14日（月・祝）　10:00～18:00（最終日は16:00まで）
会場：アクロス福岡　コミュニケーションエリア（1F）

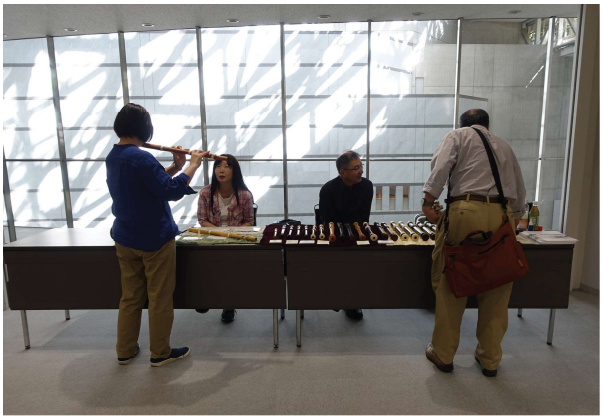
新・福岡古楽音楽祭がリニューアルして6回目を迎えた今年のパネル展は、音楽祭のテーマ「イタリアの風」にちなんで、イタリアの4つの街がとりあげられました。リュート奏者の「こーへー君」と一緒に街歩きをしながら、それぞれの街の歴史や文化遺産、音楽史に関連する知識などを楽しく学べるという趣向で、水の都として発展し音楽出版の中心地でもあったヴェネツィア、金融業で成功を収めた芸術のパトロン・メディチ家ゆかりの建造物が遺るフィレンツェ、帝国の栄光と誇り高いローマ、そして古代都市ポンペイの遺跡が眠るナポリまでを、エレガントなタッチのイラストと詳細かつ分かりやすい情報で楽しませるものでした。「こーへー君」すなわちリュート奏者の太田耕平さんが監修されたほか、野田よう子さん（イラスト）、なかやまみちこさん（文）、宮園智子さん（モデル）、イノウエトモカさん（製作協力）の各エキスパートが結集しての大作でした。パネルの一角には、2018年の音楽祭の写真も飾られ、出演者の舞台風景や講師の先生方のマスタークラスでのレクチャー風景などを懐かしく見ることができました。

展示期間中は多くの方々に足を運んでいただき盛況だったようです。会期中も数日間にわたって見に来て下さる方の姿を見かけることがあり、とても嬉しく思いました。

古楽器、CD等の展示

日時：2019年10月12日（土）～14日（月・祝）
会場： 12日（土）コミュニケーションエリア（1F）14:00-18:00
13日（日）コミュニケーションエリア（1F）10:00-18:00
14日（月・祝）国際会議場ロビー（4F）10:00-17:00

出展者：フラウトトラヴェルソ ワークショップ フクナガ［トラヴェルソ］
中嶋弦楽器工房［弦楽器］
Tokuryudo　［リコーダー］
中村ピアノ工房［チェンバロ］（音楽祭で使用）
ローランド　［電子チェンバロ］
Lila工房　［リコーダー&トラヴェルソケース］
タワーレコード［CD・楽譜販売］



今年の古楽祭でも、コミュニケーションエリアや国際会議場ロビーで古楽器の展示が行われました。古楽器製作に携わるマイスター達の作品（古楽器）を間近に見ながら質問したり、実際に試奏できる貴重な機会です。会場では様々な種類のリコーダーやトラヴェルソ、バロック・ヴァイオリン、電子チェンバロなどがずらりと並び、立ち寄る人の波が絶えませんでした。

特にコミュニケーションエリアでは、パネル展（※p.16）とも合わせて古楽を身近に感じられるオープンな空間となっており、ここで初めて古楽や古楽祭の存在を知る人もいたことでしょう。会場では終始、古楽器の音色が響いており、古楽祭の雰囲気を醸成していました。初日（10/12）のランチタイム・コンサート終演後の「楽器・CD展示コーナー」も大盛況で、多くの方々が演奏を聴いて古楽に興味を持たれたことが実感でき、嬉しく思いました。

新・福岡古楽音楽祭2019　プレイベント

アクロス福岡・フロアコンサート vol.489　特別編

日時：2019年10月3日（木）12:15開演
会場：コミュニケーションエリア（1F）

出演：廣末 真也（バロックヴァイオリン）
小池 耕平（リコーダー）
西野 晟一朗（チェンバロ）
曲目：カステッロ/ソナタ 第4番、第10番
ロカテッリ/二重奏曲 ト長調
ヴィヴァルディ/室内協奏曲 ニ長調 RV96